

市民的価値観に基づく一試論

—— 家庭小説『己が罪』を例に ——

佐 藤 八 寿 子

A Case Study on the Respectability in the Meiji Period
“Home Novel”, *Onoga Tsumi*

Yasuko SATO

0. はじめに／本稿の目的

ブルデューの文化資本による再生産理論は、普遍的知識の授与という近代教育の理念が外観にすぎないことを暴露した。文化資本概念は、日本の教育社会学研究の領域においてもすでに広く紹介導入されている。しかしながら、日本の近代教育における文化資本の表象そのもの、つまり近代日本文化における「上品さ」をめぐる具体的議論は従来等閑にされてきた。

また、日本近代社会に西洋近代社会におけるブルジョワジーあるいは中産階級にあたる階層がはたして存在した／する可否かは、しばしば論点とされてきたものの、その実体は明確にはされてはいない。ゆえに日本に中産階級は存在せず、したがって近代的成熟をみないという論も度々立てられてきた⁽¹⁾。一方で、そもそもイギリスで「堅実な中産階級」と言われた社会層の存在そのものが実は「幻影」にすぎなかったとラスレットは明言している。「実際には、今世紀全体を通じて、何百万もの人びとが、本当は数十万人にしかできないような生活を、一所懸命に追求してきた」のであり、いわゆる「堅実な中産階級」とは彼らの「上流きどり」という「擬態」によって錯覚されてきた「空疎」なものであったとラスレットはいう（訳書 1986、349頁）。

本稿が依拠しようとするリスペクタビリティ概念は、上の問題点を考察するうえで、従来にはなかった有効な方法論を提示しうるものと考えられる。モッセの『ナショナリズムとセクシュアリティ』1985の中心課題であるリスペクタビリティとは、「尊敬に値すること、りっぱさ、体面、世間体、上品」を意味する多義的なことばだが、狭義にはイギリス・ヴィクトリア時代の市民社会で頻用された価値規範をさす。モッセは、このリスペクタビリティという価値規範に、近代市民社会に普遍的な特性を見だし、大衆の「国民化」の決定要因とし

て位置づけた（佐藤 1998）。モッセによれば、「中産階級」あるいは「ブルジョワジー」といった概念は、「小売商人から学者、高級官吏まで」多種多様な集団を指し示す厄介な語であるが、「社会的行動規範の逸脱者に対抗するものとしての」リスペクタビリティが果たす統合機能によって、明確な輪郭をとって把握される（Mosse 1985、10 頁）。歴史社会学者としてのモッセの論点は、近代化の過程で「統合／排除」の機能を果たしたリスペクタビリティという価値観すなわち近代的「意識」の問題である。ラスレットは実証的アプローチから、中産階級と呼ばれていた階層が一定の幅の所得者層としては実在せず、「幻影」であったことを指摘したが、モッセの議論は、今世紀におけるその巨大な「幻影」を構築した意識そのものを対象としていると言える。

本稿は、このリスペクタビリティという語を用いることで近代社会に普遍的な固有の文化コードを措定し、そこを手がかりとした日本近代化への新視角を切り出すことを目的とする。

1. リスペクタビリティの時代

1-1. 市民的価値観の特徴

モッセにおけるリスペクタビリティは、独訳本において *Bürgerliche Moral* と訳され、日本語訳では「市民的価値観」の語が宛てられたが、原義は文字通り、他からの尊敬の「まなざし」を意識した概念である。近代市民としての価値基準であるリスペクタビリティは、ピューリタニズムを根底とし、聖書の〈自助〉の精神の基づくとされるが、精神的要素のみならず、服装、消費生活など「まなざし」の及ぶ一切の外面的要素をも含む広範な概念として、「清潔・健全・勤勉」を旨に、セクシュアリティ、言語、動作、衛生、行儀作法をはじめとして社会全般にわたる生活様式を極めて具体的に細部にいたるまで規定した。

特に本稿が後述する事例において、リスペクタビリティにおける「清潔」の徳目は重要なものである。清潔という概念は、単に物理的課題ではなく、精神的課題として把握され、清潔であることは、道徳的にも優れていることを意味した。衛生科学や性病理学の発展はもちろんのこと、性的清らかさ、清らかな交際／恋愛あるいは友情、言語の清潔、金銭上の清潔さ、志操の清潔さなど、「清潔」は多様な文脈の中で理解されることとなる。リスペクタビリティにおける「健全なる家庭」イメージも、こうした清潔観、特にセクシュアリティにおける清潔観に負うところが大きい。清潔観の発達と同時に不潔観の発展でもある。リスペクタビリティは、「清潔さ」に対抗する「不潔さ＝汚らわしさ」概念を新たに規定した。それが具体的にいかなるものだったか、また清らかな理想像はどのように提示されたのか、以下に確認する。

1-2. イギリス・ヴィクトリアニズムにおける事例

1782 年、イギリス日曜学校創設の先駆者と言われるトリマーは聖書を新たに編集しなおした。彼女からすると、神の言葉にすら子どもに読ませたくない不穏当な部分があったのであ

るまた彼女にとって『シンデレラ』は、若い読者には危険に満ちた物語だった。その話が、虚栄、衣装への愛着、継母や腹違いの姉妹への憎悪を助長するというのがその理由であった (Renton 訳書 1998、105 頁)。トリマーは 1801 年に *Oeconomy of charity or, an address to ladies* を著す。このタイトルが示すとおり、彼女は敬虔なクリスチャンとして、慎ましくリスペクタブルな生活をうちたてようとしていた。その第一歩が教育から不穏当な言語、慣習を排除することであった。

言語改変は当時のイギリス社会全体を席卷していた。リスペクタビリティを重んずる社会規範は、内容の改変はもちろん、表現上でも性的な言葉を一掃した。婉曲語法 euphemism は異常なほどの発展をした。breasts (乳房) は bosom (胸部)、arse (尻) は bottom (底) あるいは behind、posterior (後部)、leg (脚) までもが卑猥語とされて limb (四肢) と言いかえられた。身体に直接着ける衣類を示す言葉もタブーとなり、trousers (ズボン)、stockings (靴下) は、unmentionables、indescribables に言いかえられた⁽²⁾。

1818 年、医師でありまた福音主義者でもあったパウドラーは新編『家庭版シェイクスピア』を世に出した。それは、「家庭で朗読するのが憚られるような」あるいは「父親が子どもに、紳士が淑女に読んで聞かせるのを憚るような」すべての字句を削除あるいは書き換えたものだった。ハムレットの「お嬢さん、膝枕してくれない？」というオフィーリアへの台詞は削除され、代わりにその箇所には「ハムレット、オフィーリアの足下に横たわる」というト書きが書き加えられた。結局シェイクスピアは「正式な教育を受けておらず」、したがって「放埒な嗜好」にしばしば負けてしまったのだ、とパウドラーは解釈した (Mosse 1985、3 頁) (傍点筆者)。

正されたのは言語だけではなく。物語の再編は、一連の社会現象の表層の一部にすぎなかった。身なり、服装、作法、態度、行動様式など、およそ生活全般にわたるあらゆるものがリスペクタブルであるよう求められた。女の脚を連想させるという理由で、ピアノの脚までもがズボンをはかせられた⁽³⁾。パウドラーの言うところの、当時の「正式な教育」が、ピューリタニズムに基づいた厳格な性倫理を特徴としていたことが伺い知れる。

1-3. ドイツ・ピーダーマイヤーにおける事例

ドイツでは、『家庭版シェイクスピア』に先立つ 1812 年にグリム童話集、正式名『子どもと家庭のメルヘン』が出版されていた。しかしこの初版本には、さまざまな方面、特に他の童話集の作者・编者たちからの批判が寄せられる。リュース⁽⁴⁾は「しかるべき母親や乳母は、ラプンツェルの物語を無垢な娘に向かって顔を赤らめずに話してやれるだろうか」として攻撃した。ラプンツェルの物語に、婚前交渉と妊娠というモチーフがあったからである (鈴木 1991、144 頁)。これをうけ W・グリムは性的部分の徹底した削除と、婉曲表現による書き換えを行った。第二版 1819 の序文で彼は「この新版では、子どもにふさわしくない表現はすべて注意深く削除した」と述べ、さらに「われわれの狙いは、この本が教育書として役立つようにすることである」とも書いた。その後もグリムは 1857 年の第七版に至るまで改筆を重ねた。

当時のドイツにおいては、前のナポレオン時代の風潮に対する反動として、復古的、牧歌的調和、自己充足的生活、簡素で実用的な家庭の暖かみ、すなわちドイツ的「家庭の団欒」が非常に尊重された。グリム童話以前にも他の童話集がいくつも出版されており、当時すでにメルヘンを口承ではなく本として受容する「家庭」が存在していたことがわかる。この時代はその小市民的生活感、逃避的俗物趣味という特徴から、今世紀に入ってからビーダーマイヤーと呼ばれるようになる。通俗的で「正直者」の含意もあるビーダーマイヤーという固有名詞が、小市民にふさわしいものとしてしばしば嘲笑的に用いられたのだ。

グリム童話にもりこまれたビーダーマイヤー的世界観については、フェミニズムの分野に優れた研究が存在する。ボティックハイマーは、グリムが改筆を加える過程で女性差別がもりこまれたことを指摘した（訳書 1990）。メルヘンに登場する女性は、魔女か、さもなくば常に受動的な存在で、無口、従順、忍耐などによって「白馬の王子」に迎えられる。フェミニストたちはこうしたメルヘンが女子に与える深刻な影響に危機感を覚え、女性が能動的に活躍する「フェミニスト童話」を生んだ。

フェミニストの指摘した差別の内容は、ビーダーマイヤー文化に育まれ今世紀に継承されたとされる、いわゆる「伝統的」女性の理念型をさす。1970年代にネガティブな記号として読み替えられる「伝統的」女性は、「家庭」とともにグリムの時代にリスpekタブルな理想像として称揚された。

グリム童話集第七版より早い1852年、ミュンヘンで『愛の一家』1906の作者ザッパが生まれている。グリムから一世代後にあたるザッパが、家庭小説『愛の一家』において描いた音楽教師の家族は、清貧・勤勉・誠実・敬虔・献身・家族愛といった美德を余すところ無く体現したリスpekタブルな家庭のひとつの理想像であった。ザッパ自身、ネルトリンゲン市長の娘で、勤勉な母を見て育ち、ベルテンブルク町長と結婚し、五人の子どもを育て、平和な家庭を築いたとされる。家庭小説『愛の一家』は、さらに下の世代にも広く読みつがれ、日本でも「世界名作」のひとつとして長く親しまれた。

2. 明治日本における家庭小説

2-1. 「顔を赤らめる」という基準

日本にもかつて「家庭小説」と呼ばれたジャンルが存在した。

全躰私は私共の新聞に講談を載る事をだん廃したいといふ考で、それには何か之に代る適当なものを見つけた。今の一般の小説よりは最少し通俗に、最少し気取らない、そして趣味のある上品なものを載せて見たい。一家団欒のむしろの中で読れて、誰にも解し易く、また顔を赤らめ合ふといふやうな事もなく、家庭の和楽に資し、趣味を助長し得るやうなものを作つて見たいものであると考へて居ました（菊池 1969、89頁）

これは、明治期家庭小説の代表的作者、菊池幽芳の言葉である。1903年出版の単行本『乳

姉妹』の「はしがき」にあるこの文章は、小説がすでに新聞連載時から大好評を博したことをうけ、作者自らが「貴婦人方の集會せられた席上で」語った「談話」の引用という形をとっている（傍点筆者）。

パウダーは「家庭で朗読するのが憚られる」字句を一掃し、グリムは「母親が無垢な娘に、顔を赤らめずに話してやれる」よう書きかえを行い、また菊池は「顔を赤らめ合ふ」ことのないものを心がけた。場所もジャンルも異にしているにもかかわらず、イギリス・ヴィクトリアニズムにおけるパウダー、ドイツ・ビーダーマイヤー文化のグリム、そして明治日本の菊池幽芳と、三者の仕事の方針には明確な共通点が見出せる。

明治期家庭小説については、文学研究の領域では瀬沼茂樹をはじめとする研究蓄積があり、社会学においても「近代家族」の文脈ですでに論じられている。その中で、上の菊池の言はしばしばとりあげられ紹介されてきた。また、家庭小説一般におけるピューリタニズムの影響は文学研究領域では当然視されてもいる。にもかかわらず、そこにある市民的価値観、というよりむしろ「顔を赤らめ合ふ」なる句が、グリムを攻撃したリュースの発言そのものであるという単純な事実については従来指摘されずにきた。それはなぜか。

まず、瀬沼らの世代にとって、明治期家庭小説における市民的価値観／文化コードは所与あるいは正統なもので、したがって普遍的であるかのような先入観があった。彼らにとって、菊池とリュースの発言の重なりは、偶然と言ってもよいし当然と言ってもよい。つまり、いつ／どこで／誰が言っても自然な、あたりまえのメンタリティの表明でしかなかった。菊池発言の特徴や新しさは開化期における西洋受容として認識はされても、当時の社会に「然るべき態度」として受け取られ、そのことの意義について疑問は呈されずにしまった。モッセも指摘したように、今日もリスペクタビリティは社会の慣習と道徳の相当部分を決定しているのである（訳書 1996、227 頁）。

次世代、つまり価値観の定着後、家庭小説をめぐる生じた現象は極めて単純なものだったと言えよう。家庭小説は、読まれなくなった。

2-2. 「通俗小説」としての家庭小説

家庭小説は忘れられた。今日、街角の小書店の棚にも同時代の漱石の本はあるが、家庭小説を読もうとしても入手には手間取る。家庭小説としておそらく最も有名な『金色夜叉』⁽⁴⁾すら、もはや文学史的知識として書名、著者名、あるいは新派劇の決め科白が微かに記憶されるのみで、実際に物語が愛読されることは稀であろう。「常識的で、よく出来た人が、癖のある、灰汁の強い人よりも、死後、早く忘れられるように、家庭小説は消えてしまう要素を持って」いたと和田芳恵は言う（1971、785 頁）。また、いずれの文学史、研究書においても「通俗的」「単純な筋」「類型的人物像」と、家庭小説の評価は極端に低い⁽⁵⁾。

しかし同時代の社会において、家庭小説は圧倒的人気を誇っていた。『乳姉妹』に先立つこと 3 年、1899 年から翌年にかけて毎日新聞に連載された長編小説『己が罪』は「空前の成功」をおさめたとされる。1900 年に前編、翌年には中・後編が春陽堂より単行本化され、同 1900 年 10 月には前編、1903 年 9 月には後編が、新派劇として大阪朝日座で初演された。舞台も大

当たりをとり、その後全国津々浦々を風靡し「新派十八番」狂言として昭和に至っても度々上演されている。1908 年秋には映画化も実現した。映画技術そのものが最先端であった当時、『己が罪』は江ノ島海岸での「日本初のロケーション」をとりいれた映画として邦画史上に記録されている。またリメイク版は、1956 年に監督・毛利正樹、出演・乙羽信子、吉田稔により新東宝で製作された。「読んでから見るか、見てから読むか」というキャッチフレーズで、本、映画、テレビ CM、歌謡曲などによる異種メディア動員方式のキャンペーンが近くは 1970 年代にも繰り広げられたが⁽⁶⁾、『己が罪』は近代日本におけるメディア・ミックスの先駆であった。また、家庭小説は流行の発信源ともなった。1913 年から大阪毎日新聞に掲載された渡邊霞亭の『渦巻』は、渦巻人形、渦巻染、渦巻織をはじめとし、髪型、髪飾り、半襟、袋物にいたるまで、渦巻模様の爆発的流行を生みだし、百貨店とタイ・アップした宣伝まで行った（瀬沼 1969、428 頁、山田 1994）。大正初期の風俗画、写真などに「渦巻模様」を見つけたら、それは間違いなくこの家庭小説に由来するものと思ってよからう。

低い文学的評価とそれに反する高い人気というとりあわせは、決して奇異なものではない。今日でもベストセラーの上位は、しばしばコミック、写真集、タレント本あるいは推理小説など、まず書評にはとりあげられない「通俗」的書籍である。しかし、評論家が黙殺しようと作品として残るまいと、今現在我々の日常を構成する上で圧倒的な分量を占めるものは、実はそうした百年後には無名の通俗メディアの数々とそれらのもたらす膨大な情報に他ならない。その意味で、明治におけるリアルな日常を再構成しようとするとき家庭小説をひとつの手がかりとすることは有効である。通俗メディアとしての家庭小説は、その内容が「常識的で、よき出来」ていた、つまり類型的であったからこそ、名作純文学よりむしろ強力に社会通念を下支えしたと考えられる。

2-3. 「新聞小説」としての家庭小説

ほとんどの家庭小説は、新聞連載後に単行本化された。日本が近代新聞システムを導入した 1870 年代はおりしも欧米での大衆新聞成立期にあたっていた。ドイツがその実現に一世紀をかけた新聞の近代化を、日本は開国後 30 年で達成した。いわゆる「大新聞」と「小新聞」から驚くべき速度で展開発展した「中新聞」が中流階層を購読者とする新しい文化を形成し、国民的言説空間編成の礎となったと言われている（佐藤卓己 1998、87 頁）。

新聞連載小説は、その反響如何により新聞の売れ行きを左右したことから、読者受けを第一とした。そうした新聞小説の作家は自ら「小説記者」と称した。小説記者は、商品としての新聞の紙面作りの担い手であった。『一本刀土俵入』1931 の作者、長谷川伸も小説記者であったが、使い古した板木の絵にあわせて文を書き上げたこともあり、「こういう放れわざを苦もなく仕あげる職人芸を小説記者は身につけていた」という（和田 1971、785 頁）。純文学作品にありがちな孤高の芸術性や難解さは、新聞小説には許されなかった。読者サービスを旨とする家庭小説の、第一の特徴は「平易さ」だった。

同時に、小説記者は小説家であるより新聞記者でありジャーナリストであった。家庭小説を実際に「新聞」の上で読んでみれば、作中にちりばめられたエピソード、風俗などが、何

れも当時の時代最先端の情報であることに驚かされる（金子 1997、瀬沼 1969 など）。家庭小説は、情報伝達の宣伝媒介、しかもきわめて有効な媒介であった。つまり、新聞小説としての家庭小説における第二の特徴はその「報道」性にあった。

これら二つの特質により、家庭小説は最新啓蒙装置として未曾有の規模で機能することになる。このことは新聞のマスメディア化、読者層の圧倒的拡大を背景としている。新聞のマス化以前、全国津々浦々にほぼ同時に同一情報をもたらされるという事はなかった。教育体制も整い、読者層は確実に拡大している。菊池幽芳は「小説記者」であることを自らの誇りとしたが、それはこうした近代的読者層を確保した新種の啓蒙装置の「威力」に裏付けられていた。彼の自負はまさに啓蒙家としての誇りであったと言えよう。

2-4. 「光明小説」としての家庭小説

啓蒙装置であった家庭小説は「光明小説」とも呼ばれた。啓蒙 enlightenment の語義を思えば、「光明」はその特質を端的にあらわす名であると言える。

家庭小説登場以前、新聞連載小説には講談のたぐいの読み物が圧倒的であった。また明治10年頃からは『鳥追ひお松の伝』（1877-78、仮名読新聞）、『毒婦阿衣の伝』（1878、さきかけ新聞）、『毒婦お伝のはなし』（1879-、東京絵入新聞、読売新聞等）など、女性の犯罪者や情痴事件を題材とする一連の「毒婦もの」が大流行していた。江戸のエトスは、性的表現に露骨／自由で、下ネタや残虐表現も頻出していた。「毒婦もの」は、連載後しばしば草双紙合巻として出版され広く娯楽に供された（本田 1998、奥 1997）。一方で、明治文壇の主流たる純文学では、広津柳浪の『黒蜥蜴』1895、『今戸心中』1896 など、社会の矛盾や暗部をついた「深刻小説」と呼ばれる作品が流行していた。人生の不条理と悲劇を描く「深刻小説」は、社会や人間性の暗部をえぐる露悪的傾向が強かった。これに対抗して家庭小説が掲げた看板が「光明小説」だった。深刻小説の悲惨な結末に対し、家庭小説の多くはハッピー・エンドで、またそうでない場合でも社会や人生に肯定的な光を見いだしていく「明るさ」「健全さ」をその特徴としてアピールした。

上に引用した菊池の談話を再読してみよう。「最少し通俗に」、「気取らない」とは、純文学に対抗して、「趣味のある上品な」とは、草双紙風の読み物を意識しての語である。高邁だが暗い純文学でもなく、かといって下品で猥雑な講談でもない、と菊池はまず自らの立場を差異化し、その上で「一家団欒」の場にふさわしいという新しさを打ち出した。

高邁な純文学と下品な草双紙のいずれもが、「子供の目にはふれさせたくない」、あるいは「親の目を盗んで読む」といった類のものであり、到底「家庭の和楽に資する」ようなものではありえなかった。「家庭」にふさわしい、という語は「家庭小説」という命名の由来でもあり、その本質を端的にあらわしている。そこには、従来にはなかった受容の形態が想定される。高橋一郎は、「いかがわしい」ものであった小説が「教育的」な目的で読まれるようになるという、文学受容の価値の転換に着目した（高橋 1992）。また、家庭小説における「“新しさ”への希求」を指摘する金子明雄は、従来書生社会を実質的存立基盤としていた「文学」が「家庭」に侵入したことの意味について分析している。明治20年代からの、諸メディアに

よる「家庭」啓蒙の社会的な動きは、その読者層＝明治30年代に実際に家庭を築くことになる世代に、“健全、道徳的な中流家庭”イメージを根づかせた。当時、「家庭」という語そのものが、従来にないアウラをまとった「新しい知」であったのだ（金子 1990、1997）。パウダーの『家庭版シェイクスピア』、グリム童話こと『子どもと家庭のメルヘン』、そして明治期「家庭小説」には、もう一つの共通点がある。それがこの「家庭」というキーワードである。このようなアウラをまとめて登場した「家庭」小説において、菊池が真っ先にしたこととは「はばかられる」表現を叙述から一掃することであった。

3.『己が罪』を読む

3-1. 表 現

ここでは、菊池の出世作でありしばしば家庭小説の代表作とされる『己が罪』をとりあげる。東京の女学校に通っていた箕輪環は、男に騙され妊娠出産する。物語は、彼女のこの過去をめぐる罪悪感と苦悩、自責の念を縦糸として、その後の彼女の結婚、出産育児、家庭生活、秘められた過去の告白と結婚の破綻、さらに献身的愛によって夫婦間が旧に復するまでを描いている。あら筋だけ読めば、「男に騙されて妊娠出産」という物語の発端からして一向に上品でもリスペクタブルでもないかのような印象をうける。しかし、問題はその扱いである。ヒロインが「純粹無垢」を奪われる場面は、詳しい描写も一切なく簡単に説明されるにすぎない。

こゝに可憐の羊はまんまと狼の手中に落ちぬ、この後の事は殆ど記すに忍びず、只一語、環が理想の清き交際は全く破れ畢んぬ！ 環が方には幾千からの弁解あらん、羊はいかにくとも、狼の手を逃れ得可からず（菊池 1971、228頁）⁽⁷⁾。

文中の「環が理想の清き交際」とは、「肉欲の楽しみなど」「さらさら」無い「神聖なる恋愛」であった。環は「心に相許せる男女が、時來らん迄清く潔よく交はらんは如何に高尚なる楽しみにてある可きなど心に思い居」り、胸をふくらませていたのだった。

あはれ清き男女の交際！ 若し度三が環と同じ理想を抱ける健全の青年にてあらんには、その清き楽しき交際は続けられて恋に対する環の主義は実行せらるゝの日ありたるならん（菊池 1971、228頁）

この部分の挿し絵を見る〈図1〉と、中央の環が「清き恋」をイメージしつつ、右枠外よりキューピッドが放った矢に射抜かれた左上の大きなハートを仰ぎみるという構図となっている。今日のわれわれの眼には、絵柄こそ非常に古風なものではあるが、「天使」、「ハート」というモチーフは当然日本古来のものではない。また「羊と狼」というアナロジーも極めて洋風である。当時の性に対する一般通念が実際にいかなるものだったか正確に知ることは



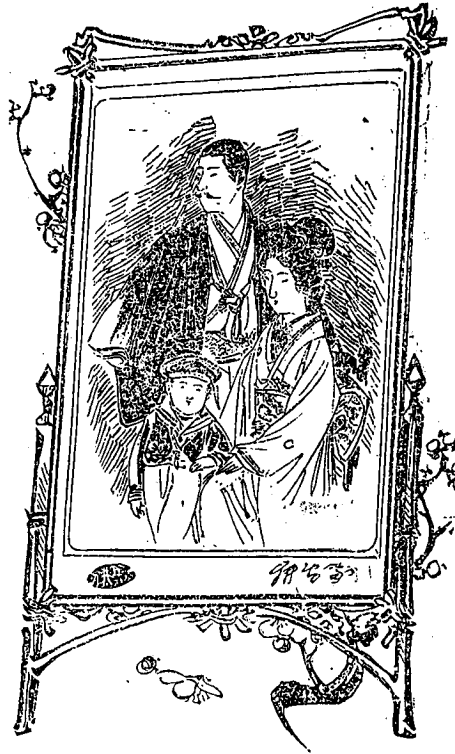
〈図 1〉

難しいが、例えば、氏家 1996 によれば、明治以前の社会において儒教道徳である「貞操」は一部のたてまえ言説であり、現実生活において不貞不倫はごく日常的行為であったとされる。少なくともここで環が憧れる「高尚」「神聖」な恋愛観が、儒教倫理ではなくプロテスタンティズムの男女観に相同であることは間違いない。

さらに『己が罪』は、非常に分かり易い形でレスpekタビリティのステレオタイプを提供した。〈図2〉は、第48話の挿し絵「家族の肖像」である。桜戸子爵と結婚し子どもに恵まれた環の一見幸福な「家庭」像である。今日ではごく自然な構図の「家族の肖像」だが、これは必ずしも普遍的構図ではない。少なくとも従来の日本の家族イメージの中には無いものだった。一方、同時代の欧米諸国では「家族写真」が人気を呼び定着していた。個人向けカメラの普及とともに、従来主に公的身分を表現していた写真は個人の私的表現の具となり、近代家族のアイデンティティとしての「家族写真」が急速に普及した（佐藤卓己 1998、96頁）。桜戸一家の肖像はその「家族写真」の典型的スタイルそのままである。

3-2. 主 題

欧米そのままなのは、こうした形ばかりではなかった。『己が罪』の中で、環の夫・従四位子爵桜戸隆弘は「東洋流の男尊女卑」を憎む、冷徹なまでに潔癖な正義漢として登場する。彼が家庭において妻に求めたのは貞潔と善良であり、我が子の躰で殊に重んじたのは誠実と正直であった。不貞、虚偽、秘密は最も卑しむべきで、華族である先妻の不義に心から幻滅した隆弘は、「腐敗した」階級の出身者よりむしろ平民の娘を望んだ。ここにイメージされる



〈図 2〉

理想の家庭像は、旧日本社会の身分やその階層を存立基盤とする「イエ」を解体し、「ホーム」という言葉により輸入されたキリスト教的概念の上に建てられている。

家族社会学研究における小山隆、横江勝美らのケーススタディ（小山 1932、横江 1939）によれば、明治期に至っても藩士と百姓町民との婚姻はまず行われず、藩士社会内部でも大多数は同一階層内、さもなくば隣接階層間である。かつ隣接階層間の婚姻では、女性が下の階層へ移動する。『己が罪』の環は豪農の娘という設定であり、いかに富裕でも彼女が華族と結婚（階層を「飛び越え」「上」へ移動）することは現実ではまず考えられない（作中でも環の父は玉の輿に狂喜する）。桜戸家の肖像がいかに理想的、理念的なものであったか、またその理想を称揚する情熱がいかに強烈なものだったかが伺えよう。

さらに桜戸は「風俗改良事業に携わる」が、この設定は当時大流行した一連の道徳運動を背景としている。1893年発足の日本婦人矯風会は、「世界平和、純潔、酒害防止」を三大目標とし婦人保護事業ならびに社会教育活動を行った。その前身は1886年創立の矢島楯子を会頭とする東京婦人矯風会で、海外醜業婦取締、一夫一婦制の建白、「集会及政社法」反対、公娼全廃運動などに活躍した。会の正式名称は日本基督教婦人矯風会である。ピューリタン精神に基づいて1874年アメリカに誕生したキリスト教婦人矯風会の運動は専ら禁酒を中心と

していたが、Temperance [自制、節制、節酒、禁酒] は日本では「矯風」と翻訳され、禁酒禁煙のみならず一夫一婦制、公娼廃止さらに参政権の闘争にも展開した（日本キリスト教婦人矯風会 1986 27、62-76）。結婚について正規の立法を制度化し登録を始めたのはピューリタンであり、近代的核家族はプロテスタンティズムによって創造されたとされるが（Armstrong 1986）、日本においても近代的道德運動のさがけとなったのがキリスト教関係者であったことは間違いない。

しかしながら、『己が罪』の環も隆弘もキリスト教徒ではない。むしろ環を欺くプレイボーイが「似非クリスチャン」として登場する。キリスト教はそのハイカラさによってむしろ環を眩惑するネガティブな道具でしかない。にもかかわらず『己が罪』作品世界の礎となっている倫理観は徹頭徹尾ピューリタンのものである。このことはいかに理解すべきだろうか。

同時期、日本の仏教界、特に西本願寺派において「禁酒」運動が盛んに繰り広げられていた。また、1890年に設立された日本初の日本禁酒同盟会は、1919年にキリスト教色に強く反対する国民禁酒同盟がそこから分離独立し、翌年日本国民禁酒同盟としてまた両同盟が合同するといういきさつもあった。一方、「万朝報」では一夫多妻の蛮風に反対する一大キャンペーンがはられていた。仏教界および国民的禁酒運動ならびに一般新聞による一夫一婦制の推奨は、これらピューリタンの倫理観が、すでに脱宗教化された欧米の常識、つまりグローバル・スタンダードとして当時の日本社会で理解され、かつ浸透しつつあったことを示すものと考えてよい。これらの運動が、むしろ近代日本の建設の意識や使命感に支えられていた事実は看過しがたい。

環の「神聖なる恋」への憧れはこうした時代思潮を背景としている。彼女の憧れが強く、また夫が高潔で、二人のイメージする理想の家庭像が崇高であればあるほど、環の過去の咎はより醜悪となり、それを隠し続ける彼女の罪はより重くなる。子どもの死を契機とする環の罪の告白によって、物語はついにクライマックスを迎える。

3-3. 物語の終わりとリスpekタビリティ

罪の告白によって夫婦間は破綻し、夫は印度へ哲学研究の旅に出、環は贖罪のため篤志看護婦として台湾にわたる。旅先で伝染病に罹った桜戸は瀕死のきわに妻の名を呼び、環は電報により夫の病床にかけつける。環の献身的看護により病気は回復、夫の正義は妻の愛によって寛容を学び、夫婦間は旧に復する。かくして物語はハッピーエンドを飾る。

看護婦という職業が社会的に認知されたのは、F. ナイティンゲール以降と言われる。プロテスタント婦人奉仕団病院で看護婦訓練を受けたナイティンゲールは、クリミア戦争でトルコのスクタリ基地に従軍し、低劣な衛生条件で伝染病の続発する陸軍病院の改善に奔走した。彼女たち看護婦団の働きによって従来「下働き」にすぎなかった看護の仕事は「聖職」、「天使」の仕事と見なされるようになった。帰還後はロンドンの聖トマス病院にナイティンゲール看護学校が設立され、日本でもその影響を受けて1887年前後に桜井女学校、東京帝国大学病院、慈恵会医科大学病院、日本赤十字社などに、相次いで看護婦養成所が設立された。しかし、そもそも裕福な家庭に生まれたナイティンゲールはなぜ看護婦になったのか。そして

なぜ、環は看護婦になって台湾へ行かねばならなかったのだろうか。

1870年代から第一次世界大戦が勃発する1914年にかけての時代、日本でいえば明治という新しい時代をほぼすっぽりとおおう四〇年あまりの間、メアリ・キングズリやイザベラ・バード、フローラ・ショウのような女性たち、あるいは『植民地看護協会』派遣の看護婦やメアリ・スレッサーのような女性宣教師が、つぎつぎと、海外に広がる大英帝国に向かって飛び出していった。(井野瀬 1998、13頁)

この「イギリスの明治時代」、海外に飛び出した女性たちの事情は様々だったがそこには二つの共通点があったと井野瀬は分析する(同上)。すなわち、① 中産階級(もしくはそれ以上)の家庭で育ち、礼儀や教養を備えたレディであったこと、② レディであるがゆえに、帝国に対してなんらかの責任を感じ、それを果たそうとしていたこと、である。

看護婦として、あるいは宣教師として「白人女性の責務」に自らを捧げた彼女たちの姿は、主に宣教や教育を目的に明治日本を訪れた欧米婦人たちの姿でもあり、また動機はともあれ、篤志看護婦として台湾へ渡った箕輪環の姿でもあった。環もまた、① 良家の育ちで、高等教育を受けた「子爵」夫人である。また、② 彼女の苦悩は夫の理想に応えようとする「女性としての責任」感に根ざしており、贖罪の為に看護婦となるという発想もまた献身の美德と神聖とを体現している。つまり、レディでありかつ自らの責務に自覚的、さらに任務遂行の為に挺身する潔さ(献身)、これこそ当時の万国共通とも言える「リスペクタブルな女性」の理念型だったのだ。

4. おわりに/ミッションとグローバル・スタンダード

明治30年代、新聞連載の家庭小説『己が罪』に心躍らせた読者は、環の清き恋への憧憬に共感し、罪の苦悩に伴伴し、あるいは彼女の玉の輿に羨望を感じつつともに喜び、またあるいは白衣の環に憧れを覚えたことだろう。それは、従来には全く無かった新感覚であったはずだ。このような家庭小説の「新味」は、従来はピューリタニズムの影響ひいては舶来文化の香りとして解釈されてきた。しかし、上述のように、例えば看護婦が新しい職業であるのは西洋においてもまったく同様だったのだ。

すでにグローバル・スタンダードとしての市民的価値観という語を用いたが、グローバルという概念、すなわち世界がその両端に西洋と東洋をもつのではなく球体として存在することの実質的発見については、園田1993が指摘している。市民的価値観は、従来のパラダイムでは「東漸」してきた舶来思想としてしか把握されまいが、逆にピューリタニズムのフロンティア、Manifest Destinyのさらなる「西漸」現象と解釈することも可能である。19世紀中葉に生まれた地球規模でのコミュニケーション・システムのもと、文明を学ばねばならなかったのは後進意識にとりつかれた日本のみならず西洋諸国もまた同様であり(園田1993、13頁)、世界は確実に同時進行で動いていた。箕輪環が体現し明治の読者が共感した市

民的価値観も、舶来ものとしてではなく、社会の近代化の過程に共通して認められる一事実として把握するほうがより客観的とは言えまいか。本稿の問題意識は、ビューリタニズムの伝播あるいはリスペクタビリティ規範の受容といった点ではなく、近代化過程における社会規範の見逃し難い構造的相同性そのもののほうにある。

トリマー夫人の自著のタイトルは、Oeconomy of charity or, an address to ladies であった。lady ならびに charity という語は、リスペクタビリティを理解する上で欠くべからざる概念である。看護婦が下僕ではなく聖職たりえるのは、根底に charity の精神あればこそであり、また当事者の強い使命感 mission なくして献身的な職分の貫徹はありえない。良家の教養ある婦人をして地の果てにまで赴かしめたものは、(それが建前の場合も当然あったにせよ) ひとえに mission の情熱だった。ヴィクトリア朝時代のリスペクタブルな婦人による charity 活動の代表的なものは、貧民街における衛生指導であった。このことは、近代社会の市民的価値観であるリスペクタビリティ、ひいては近代教育が胚胎する mission の拡大原理を象徴的に暗示している。「文明的な基督教の支配下に粗暴な蛮人を導き、敬虔で正しく道徳的な生活をこの世で送る術を学ばせるため、海を越え山を越えて旅をし、わが身や財産をなげうつことが万人の義務となるのだ」という〈西洋的優越感〉を相対化し、問題の前提としたデュル(訳書 1997、2 頁)のエリアスに対する問題提起は、その意味で、西洋ならぬ日本の「文明開化」を考察する際の有効な手がかりとなろう。

〈注〉

- (1) 日本における中流階級の議論については、特に園田 1999 が示唆に富む。
- (2) CD-ROM「世界大百科事典」日立デジタル平凡社 1998 の「ピーターマイヤー」、「猥褻」(小池滋)の項目より抜粋。
- (3) Ruhs, Christian Friedrich (1781-1822) は歴史学、地理学者で旅行記の編纂者。
- (4) 『金色夜叉』が高く評価された理由について、タカラ=テルは『不如帰』との比較で、前者が都市の伝統的=〈土族的〉読者に支持されたのに対し、後者は女工など新興の〈平民的〉文学読者層に支えられたためと解釈した(『新文学入門』1951)。
- (5) ブロックバスター方式を採用した角川書店は、『犬神家の一族』1976(横溝正史原作、市川崑監督)によって映画に進出した。
- (6) 例えば伊藤整『近代日本の文学史』1958 において菊池幽芳の名は、一以下の文脈においてのみ登場する。「柳川春葉は、紅葉の死の直後から、田口掬汀、北村北星、菊池幽芳などとならぶ通俗的な家庭小説の作家として名を成し純文学作家としては問題にされなくなった。(138 頁)(傍点筆者)」
- (7) 『己が罪』は、講談社の『大衆文学大系 2』、小杉天外・菊池幽芳・黒岩涙香・押川春浪集 1971、『菊池幽芳全集』日本図書センター 1997(『幽芳全集』全 15 巻、国民図書 1924-25 の復刻版)等で読むことが出来る。本稿引用文は『大衆文学大系』によった。

〈参考・参考文献〉

- Armstrong, Karen 1986, *The Gospel According To Woman-Christianity's Creation of the Sex War in the West*, Anchor Books, Doubleday 『基督教とセックス戦争—西洋における女性観念の構造』高尾利数訳 柏書房 1996
- Bottigheimer, Ruth B. 1987, *Grimms' bad girls and bold boys: the moral and social vision of the tales*, Yale University Press 『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』鈴木晶他訳 紀伊國屋

- 書店 1990. 7
- Duerr, Hans Peter 1993, *Obszönität und Gewalt: Der Mythos vom Zivilisationsprozess*, Band III, Suhrkamp Verlag, Frankfurt/M. 『性と暴力の文化史 文明化の過程の神話Ⅲ』藤代幸一他訳 叢書・ユニベルシタス 574 法政大学出版局 1997
- 本田康雄 1998 『新聞小説の誕生』平凡社選書 183 平凡社
- 井野瀬久美恵 1998 『女たちの大英帝国』講談社現代新書
- 川上富蔵 1979 『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』毎日新聞社
- 金子明雄 1990 「明治三〇年代の読者と小説—『社会小説』論争とその後」『東京大学新聞研究所紀要』第41号
- 金子明雄 1997 『『家庭小説』と読むことの帝国—『己が罪』という問題領域』『メディア・表象・イデオロギー：明治三十年代の文化研究』小森陽一他編小沢書店
- 菊池幽芳 1969 「乳姉妹」『明治家庭小説集』明治文学全集 90 筑摩書房 春陽堂 1904 初出
- 小山隆 1932 「婚姻を通じて見たる士族の社会」季刊『社会学』第四輯
- Laslett, Peter 1965, *The world we have lost* 『われら失ひし世界 近代イギリス社会史』川北稔他訳 1986 三嶺書房
- 前川道介 1993 『楽しいピーターマイヤー』クラテール叢書 国書刊行会
- 松浦京子 1994 「社会の規範—リスペクタブルであるために」『イギリス文化史』井野瀬久美恵編 昭和堂
- Mosse, G.L. 1985, *Nationalism and Sexuality: Middle-class Morality and Sexual Norms in Modern Europe* 『ナショナリズムリズムとセクシュアリティ』佐藤卓己・八寿子訳 柏書房 1996
- 牟田和恵 1996 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』新曜社
- 日本キリスト教婦人矯風会編 1986 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版
- 奥 武則 1997 『スキャンダルの明治—国民を創るためのレッスン』ちくま新書
- Renton, Alice 1991, *Tyrant or Victim? A History of the British Governess*, Weidenfeld and Nicolson, London 『歴史のなかのガヴァネス 女性家庭教師とイギリスの個人教育』河村貞枝訳 1998
- Rölleke, Heinz 1985, *Die Märchen der Brüder Grimm*, Artemis Verlag München und Zurich, Munchen
- Shorter, Edward 1975, *The making of the modern family* 『近代家族の形成』田中俊宏他訳 昭和堂 1987
- 瀬沼茂樹 1969 「解題」, 「家庭小説の展開」(『文学』1957.12, 『近代日本文学の構造 I 明治の文学』集英社 1963 所収), 『明治家庭小説集』明治文学全集 93 筑摩書房
- 鈴木 晶 1991 『グリム童話 メルヘンの深層』講談社現代新書
- 佐藤卓己 1998 『現代メディア史』岩波書房
- 佐藤八寿子 1998 「リスペクタビリティとは何か」『教育・社会・文化』研究紀要第5号
- 園田英弘 1993 「極東の終焉—黒船前史」『西洋化の構造—黒船・武士・国家』思文閣出版 (『19世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所 1985 初出)
- 園田英弘 1999 「近代日本の文化と中流階級」『都市文化 近代日本文化論 5』岩波書店
- 高木健夫 1974 『新聞小説史 明治篇』国書刊行会
- タカクラ=テル 1951 『新文学入門』理論社
- 高橋一郎 1992 「明治期における『小説』イメージの転換—俗悪メディアから教育的メディアへ」『思想』歴史・表象・文化 812号。
- 氏家幹人 1996 『不義・密通—禁じられた恋の江戸』講談社選書メチエ
- 和田芳恵 1971 「解説」『大衆文学大系 2』講談社
- 山田有策 1994 「渦巻」の項, 『日本現代文学大事典 作品篇』三好行雄他編 明治書院
- 横江勝美 1978 「藩士社会における身分と婚姻—加賀藩士の身分的内婚に就いて」『家族と村落』第一輯 戸田貞三他監輯 お茶の水書房 (昭和14年日光書院の復刻)